

日仏語の音に対する態度

岡 本 克 人

(人文学部仏文研究室)

La Conception de son et de bruit dans les langues française et japonaise

Katsuto OKAMOTO

Le son pur est une sorte de création. La nature
n'a que des bruits. — Valéry

山々の一度に笑ふ雪解ゆきどけにそこは沓々くつくつここは下駄々々げたげた
— 山東京伝

はじめに

通常の言語使用において一般的に日本語はオノマトベ（擬音語・擬態語）が多く、一方フランス語は極端に少ない。また問題は数の多少だけではなく、その在り方も大きく異なっている。本稿では、オノマトベ研究の一環として、この差異がどこから生まれるかを、特に日仏語の音に対する態度から探ってみることにする¹⁾。なぜならオノマトベは音に対する関心（それが人間の外に存在する音であれ、あるいは発声中の言語音であれ）がなければ、絶対に生まれるはずのないものであり、音に対する関心の在り方が、オノマトベの在り方に反映していると考えられるからである。

1. 音, 'son', 'bruit'

日本語の「音」に一応、対応するのはフランス語の 'son' と 'bruit' であろう。まず、「音」と 'son' の意味を辞書で調べると、たとえば次のように書いてある。

- ◇ 空気・水などの振動によって聴覚に引き起こされた感覚の内容。また、その原因となる空気などの振動。音波。(大辞林)
- ◇ 音波によって起る聴覚の内容。または、音波そのものを指す。(広辞苑)
- ◇ Sensation auditive créée par les perturbations d'un milieu matériel élastique (*spécialt.* l'air); ce phénomène physique. (Petit Robert)
- ◇ Sensation auditive engendrée par une onde acoustique. (Petit Larousse en Couleurs)

両者を比べると、興味深い事実に気付く。フランス語で *sensation auditive* とは聴覚のことであり、そうすると、やや図式的にいうと、フランス語の 'son' の説明は「～聴覚。」にとどまるのに対し、日本語の「音」の説明は「～聴覚の内容。」と、なっているわけである。ここに思わず知らず現れた、

というのは妙な言い方かもしれないが、「内容」という語の付加は、日本人の音に対する典型的な態度が現れていると思われるのである。すなわち、日本人が「音」というとき、それは「内容」をも含む、つまり聴覚が喚起するところの様々な情報、印象をもふくめて言っているのである。したがって、日本人にとって「音」は本質的に「聞き入る」ものである。「聞き入る」とは考えてみれば、よく出来た表現で、聞いて、そして、その中に入ってしまうのである。たとえば日本人にとって、『平家物語』の冒頭、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」(この場合、形のうえでは「声」であるが、結局これは鐘の音である。)は、直観的理解は容易で、古典を初めて習う高校生も、字句の説明さえ聞けば、あとは特に疑問をいだかないはずである。「私は、『源氏物語』全編の上に、祇園精舎の鐘の音が、いんいんと響きわたっているのをおぼえた。」(『現代の文体研究』安本美典、p. 397)というような言葉は、日本人の音に対する態度を典型的にあらわしたものの一つであると思われる。

これに対し、'son' (あるいは 'bruit') は基本的に、人間がそこから出発して論理的な反応をおこすための足場のようなものである。次の日仏の文が、この決定的な差異を表現している。

そういう嵐の音の底にごおっと遠い音が聞こえて来た。

汽車が丹邦トンネルを通る音だ。そう信吾にわかっていた。またそうにちがいがなかった。(『山の音』 p. 123-124)

; des profondeurs de la tempête se rapprochait un grondement lointain.

"C'est un train qui traverse le tunnel de Tanna", pensa-t-il; ce ne pouvait être autre chose. (p. 99)

この例において、日本語では「汽車が通る音だ」と、焦点は音に向けられていくが、フランス語においては、「それは汽車だ」と、音をたてる主体へ焦点がしぼりこまれる。どうして日本語では「汽車が通る音だ」で済むのかというと、「音」という表現の中に「内容」が含意されているからである。これに対しフランス語では音と、音の発生源である主体との論理関係に触れることになる。

次に「音」を表すもうひとつ重要なフランス語の 'bruit' について調べてみよう。日本語にも「雑音」という言葉があるものの、この語は「雑」+「音」で出来ていることからわかるように、あくまでも「音」の一種である。また「雑音」という表現はごく限られた範囲でしか用いることが出来ず、「蛍光灯のジーッという雑音」などというのは奇妙である。これに対し、フランス語の 'bruit' は、形の上でも意味内容においてももっと独立性をもった語である。

フランス語の辞書の 'bruit' の説明は日本人にとって必ずしも明快ではない。

◇ Ensemble des sons produits par des vibrations, perceptibles par l'ouïe. (Petit Larousse en Couleurs)

'Ensemble des sons' とは奇妙な定義であり、この項に併記してある *Des bruits de pas. Le bruit des vagues.* という例を見るとよけい分からなくなる。

◇ Ce qui, dans ce qui est perçu par l'ouïe, n'est pas senti comme son musical; phénomène acoustique dû à la superposition des vibrations diverses non harmoniques. (Petit Robert)

この説明も上のものよりはましであるが、日本人にはどんな音が son musical なのか (楽器の音は別として)、何をもって harmoniques とするのかがよく分からないから、'bruit' についての明確な概念が得られない。ちなみに次の同義語辞典でも事情は同じである。

◇ Bruit se dit d'un son ou d'un ensemble de sons sans harmonie. (Nouveau Dictionnaire des Synonymes)

そこで具体的に'son'と'bruit'が出てくる文章をみてみよう。次の'Vous avez dit acouphènes?'と題する5ページにわたる記事は'son'と'bruit'の使い分けについてある程度の理解を与えてくれる。

Un matin, je remarquai un drôle de son dans mon bureau, comme ce léger sifflement que fait un téléviseur quand on le met en marche, mais en plus faible et plus aigu. J'avais déjà entendu ce son ailleurs et je me demandai ce que c'était. (Sélection, avril 1989, p. 44-45)

筆者はある朝、テレビのいわゆるホワイト・ノイズ様の音を聞いたのであるが、すぐあとに'sifflement'と表現しているように、これはあまりいい音ではなかったはずだ。すなわち'bruit'に分類されてもいい音なのである。

Ça ne venait pas de l'éclairage: lorsque j'éteignis les lumières, le sifflement me parut encore plus fort.

Je m'enfermai dans le placard et attendis que cesse le bruit des cintres qui s'entrechoquent. Le sifflement était toujours là. De toute évidence, ça se passait dans ma tête.

心配になった筆者は蛍光灯を消してみたり、衣装戸棚にもぐり込んだりしてみるがシャーという音(とでも訳しておこう)は消えず、自分の耳で鳴っているのを確認する。

-Ce sont des acouphènes, me dit le Dr Jack Vernon lorsque je l'appelai au téléphone.

それは耳鳴(症)で、だれでもときどきあるものだ、と医者は言ってくれるが、コーヒー、アスピリン、抗生物質を飲み過ぎていないか、とたずねられ、ノンと答えると、あなたのは強度のもので今後、その音がずうっと止まない可能性が5分の1はある、とおどかされる。彼のクリニックはこの音から逃げられなくなってもうどうしたらよいか分からない患者であふれている。さてこの医者は別の患者のこんな例を話してくれる。

(...): un ouvrier de quarante-deux ans se réveille un matin avec, dans l'oreille gauche, un bruit qui ressemble à un grincement de freins. Il prend de l'aspirine, un tranquillisant - rien n'y fait.

この部分は冒頭の部分と状況はきわめて似ているわけであるが、今度は'son'ではなく、'bruit'が使われている。この両者の差異は、音そのものの性質(物理学的な音響)によるのではなく、むしろ話し手の態度、あるいは受け取り方によることがわかる。前者の例では、筆者が奇妙な音に気付いて、それが一体何の音なのか、どこから出ているのかさっぱり分からない。したがって筆者はいわば中立的な態度で音を'son'と表したのである。後者の例では、医者には困った音であることがすでに分かっているので、'bruit'に分類したのである。

ここで、考えうるのは'son'というのは結局、人間の理性と調和する音(音楽がそのさいたるものであろうが)であり、'bruit'は理性の働きをさまたげるものとしての音をいうのでないか、ということである。ここでいう理性とはもちろんフランス人のこよなく愛する'raisonnement'の意識である。もう少し別の例を見てみよう。

Pendant que je travaillais, et dans les moments où la fatigue m'anéantissait, j'entendais le son de l'or, je voyais de l'or devant moi, j'étais ébloui par des diamants! ('Facino Cane' p. 60-61)

働いている最中に、そして疲労困憊したときに、わたしは黄金の音を聞き、目の前に黄金を見、ダイヤモンドに目が眩むような気がしたのです! (石田友夫訳)

財宝を手に入れようとしているファチノ・カーネにとって黄金の音(これはあとの部分を読むと、金貨のぶつかる音を特にさしているようであるが)は、当然のことながら、'bruit' などではない。しかしこれが隣室で他人が毎晩金貨を勘定する音であったらどうであろうか。

また次の例においても同じようなことが言えよう。

Une autre expérience m'occupa un instant: je tapai autour du cercueil, afin de savoir si, par hasard, il n'y aurait pas quelque vide, à droite ou à gauche. Partout, le son fut le même. Comme je donnais aussi de légers coups de pied, il me sembla pourtant que le son était plus clair au bout. Peut-être n'était-ce qu'un effet de la sonorité du bois. ('La Mort d'Olivier Bécaille' p. 92-93)

も一つ他の経験をひととき試みてみた。右か左に、万一、どこか空間がありはしまいかと知るために、柩の周囲をたたいてみたのである。どこも音は同じであった。また足で叩いてみると、音は底の方が一層ははっきりしているようであった。おそらく木のひびきの所為だろう。(水谷謙三訳)

生きたまま埋められてしまったオリヴィエ・ベカーユにとって柩をたたいて出て出る音は騒音などではなく、彼が全力をあげて調べている脱出方法を教える鍵となる音である。これは彼の 'raisonnement' にかなる音である。

'son' と 'bruit' の使い分けについてはより一層の探査が必要であると思うが、今回は、「音」と 'son' 'bruit' について意味の概略を把握したこの時点でとどめておく。重要な点は、日本語においては、人間は音と溶け合ってしまうのに対し、フランス語においては、人間が理性をもって音と対峙しているという点である。

2. せりふの表記

せりふというのは音声であるから、音に対する関心のあり方が、ここでも反映してくることになる。日仏語(ここでは英語の材料も加えることにしたいが)間の翻訳において、かなり異なってくるものの一つは、せりふの表記の仕方である。日本語は耳に入ってくる音を状況判断の材料とし、また場合によっては味わって楽しむ傾向があるので、聞こえてくる音はすべて書き表さないと気が済まない、といった風であるのに対し、フランス語は要点さえ分かればよい、といった書き方が多い。

川端康成の『雪国』の最初の部分にある、日本人ならこれなしには済まされないと書いてもいいほどのせりふが、仏英訳ではカットされている。

娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、(…)

Penchée à l'extérieur autant qu'elle le pouvait, la jeune personne appela l'homme du

poste à pleine voix, criant au loin.

L'homme approchait, (...) (p. 15)

Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.

The station master walked slowly over the snow, (...) (p. 3)

このせりふの削除について、金田一氏はネイティブ・スピーカーの協力を得て次のように説明している。'Station master!' はどなっているようで娘の言葉としてふさわしくない、'Mr. Station master!' ではまるで子供である。大勢人がいるときに、駅長だけ呼ぶいい方は英語になく、もし 'Hey! Excuse me!', 'Hello!' などと言うとそこに居る人が皆こちらを向く可能性が高い、と。したがって「『駅長さあん!』という呼び方が出来るのは、「さん」という、苗字だろうと、名前だろうと、職名だろうと、何にでもこれを付けさえすれば、敬意を表わす接尾語があるため、そうだとすると、この接尾語が日本語にあることは、我々の言語生活に大きな便宜を与えていると言える。」(『日本語への希望』p. 20-23) と、やや早急な結論に辿り着くわけであるが、この結論はともかくとして、それ以上の分析が行われていないのは問題である。筆者は日本語のネイティブ・スピーカーである金田一氏も、英語のネイティブ・スピーカーである「ギブス」という人も気付いていない重要な点があると思う。ここで呼び声の削除が行われたのは、「駅長さあん」にあたる言葉がないというような単純な理由だけによるのではなく、そんな呼び声をここで訳出するのは不適切であるとサイデンステッカー氏が判断したに違いないということである。筆者が返事を誘導してしまわないように、ごく慎重に、日本語を勉強中のネイティブ・スピーカー (アメリカ人) に感想を求めたところ、予想通りの (あるいは予想以上というべきかも知れないが) 答えが得られた。まず、原文を念のため、きちんと説明した上、「さて、『駅長さあん、駅長さあん』が英文にはないが、どう思うか」とたずねると、「ここにちゃんとあるじゃないですか」と直ちに 'the girl called to the station master ...' をさし、げげんそうな顔をする。この反応は、筆者の予期を上回るものであった。つまり、筆者は上記のような考えがあるにもかかわらず、やはり日本人であるために、相手が少しは逡巡を示すだろうと思っていたのである。そこで、日本人には、このせりふがどうしても要ることを説明すると、それは何となく分かるけれども、もしここで似たようなものが英語で書けたとしても、それは我々には相当ちがった 'resonance' をもつはずで、英語では、こんな呼び声は 'superficial' なるものである、という答えが返って来た。なお、自分は日本語がまだよく分からないので原文の味はわからないが、とにかく英訳はよく均整のとれた、美しいもので、ここに呼び声が入ると、何もかもぶちこわしになるだろう、という感想も聞くことが出来た。

さて仏訳でも呼び声の直接的な訳は無いわけだが、事態は同じであろう。かつてフランス人にこの件について質問してみたところ、'chef de gare' は男をにやにやさせる妙な意味があるとか、何とか逃げられてしまったけれども、本質的にはせりふを音として忠実に写すという性質がフランス語には無いからであると、判断する。

次の例をみてみよう。

「菊子、菊子さん。」と保子が呼んだ。

「こちらにもお蜜柑を少しちょうだい。」(『山の音』p. 114)

"Kikuko! appelait Yasuko. Voudrais-tu nous apporter à nous aussi des oranges?"

(p. 92)

原文では菊子は2回呼ばれている。しかし仏訳では1回だけの訳出となっている。ここで、日本

人がいかに発声されたとおり、せりふを書き、また聞き取らないと気が済まないか、を示す興味深い例を紹介しなければならない。上記のアメリカ人とちょうど反対の反応になるわけだが、仏文科のある学生は、この翻訳例について、日本語ではちゃんと2回言っているのだから、それを1回に減らしてしまうのは、「合理的でないと思う」と、主張し、フランス人にとっては、これが合理的であることを、根本的なところからいくら説明しても納得出来ないでいる。他の学生がすぐに理解出来たところから、これは発想の転換が出来ない人のやや極端な例と思われるけれども、この感じ方そのものは同じ日本人として大変良く分かる。

ここで1回しか“Kikuko!”と書いてないが、これをフランス人は1回だけ呼んだのだ、とは必ずしも思っていないのである。別の証拠を挙げよう。

“Dr. Lohmann called me with the diagnosis. It's Guillain-Barré, Sue.” His voice broke as he said my name.

“I don't know much about the disease,” he went on. “I'm not sure anyone does. They say it's rare. Dr. Lohmann has seen only one other case, and he said that one was quite mild. Yours may be more serious.”

A long, low, horrified “No-o-o-o” escaped my lips. “No! No! No!” (‘Reader's Digest’, Aug. 1989, p. 130)

—Le docteur Lohmann m'a téléphoné. C'est le syndrome de Guillain et Barré. On ne sait pas grand-chose de cette maladie, poursuivit-il d'une voix altérée. Il paraît que c'est très rare. Lohmann n'en a vu qu'un seul cas, relativement bénin. Le tien pourrait être plus grave.

Je laissai échapper un: “Non!” (‘Sélection’, Avr. 1989, p. 165)

これは、リーダーズ・ダイジェストの記事から採ったものであるが、もちろん英語の方が原文である。主人公は夫から、医師の診断—自分は奇病で、しかも重症であることを、聞かされ、思わず‘No!’を叫んでしまう。英語の方では‘No’が計4回並べてあるわけだが、仏訳のほうでは、ただの1回である。これは別にフランス版で主人公の叫び方がシンプルになった訳ではなく、単に表記法が変わっただけのことである。フランス語ではせりふさえも十分に対象化されて一種の目的語になってしまうのであるが、次は別のテキストから採った例である。

Facino Cane cessa de jouer, se leva, vint à moi et me dit un: “Sortons!” qui produisit sur moi l'effet d'une douche électrique. (‘Facino Cane’, p. 44-47)

ファチノ・カーネは演奏を止めて立上がり、わたしの方へ来て、ひとこと「出ましょう！」と言いました。それを聞くとわたしは電気療法を受けたような気持ちになりました。(石田友夫訳)

上の例においては“Sortons!”というれっきとした文が un “mot” と同じレベルまで、対象化されており、それはあとに続く‘qui produisit sur moi (...)’を見ても明らかである。このようにフランス語がせりふを人間から出た音声として描くのを避け、論理の中に位置づけようとする傾向が強いのは、根本的に音を理性でもって‘son’と‘bruit’にふりわけてしまおうとする傾向と合致しているようである。

3. もの・こと・おと

ほろほろと山吹ちるか瀧の音
 pétale après pétale
 tombent les roses de Chine
 —fracas des eaux (Jours de printemps', p. 43)

この芭蕉の句の苦心の仏訳は、(俳句の訳というのは何か常に苦しさが宿っているが)何か果てしない説明か、あるいは豊かな想像力で補われなにかぎり、安っぽい絵を観ているような気がする。仏訳に欠けているものは、五、七、五のリズムであろうか、「ほろほろ」というオノマトペであろうか、あるいは「か」という含蓄のある助詞であろうか、あるいはまた、「山吹」は吉野川と結びつくが、'roses de Chine' はそうではない、という事実であろうか。いずれもこの仏訳俳句を貧しくしている要因であろう。しかし、もっと根本的な、この場合ほとんど絶望的に立ちはだかっている壁は、日本語が見入り、聞き入っている世界にフランス語がその構造上、決して入っていくことがない、ということである。誰でもすぐ気付くように、この訳はまず「ほろほろ」というオノマトペが欠損しているために大きくつまづく。又、一見、問題がなさそうに見えて実はこの訳を大きくそこなっている「(瀧の)音」に当たる'fracas (des eaux)'について考えてみよう。「音」とは先に検討したように、「内容」をも含意する言葉である。それに対して'fracas'とは明らかに'bruit'に所属する音で、辞書を引けば分かるように「(碎けるような)すさまじい音、激しい物音/騒々しさ、喧騒(仏和大辞典)」、あんまり聞き入るようなありがたい音ではないが、それほど強い意味をこの場合持っていないとしても、この音が'bruit'の一種である限り、本質的に理性によってすでに分類ずみの「非音楽的な、調和を欠いた音」である。したがって、この'bruit'に聞き入るのは難しい。

やはり「音」という言葉で終わる有名な句について、精神病理学者の木村敏氏はすぐれた見解を示している。

「古池や蛙飛び込む水の音

このだれにでもよく知られた芭蕉の俳句は、形の上では、いくつかのものについての描写以上のなにもをも含んでいない。古い池に蛙が飛びこんだ水の音、それだけのことであって、文章構造の上では「木から落ちるリンゴ」とほとんど違わない。事実、この句をもし外国語に直訳してみたら、なんの情感もないものの世界の報告文になってしまうことだろう。

しかし日本人ならばだれひとりとして、この俳句をものの世界の単なる報告文として読む人はいないだろう。ここには一つのことが隠されている。このことは、蛙の飛びこんだ古い池の水の音のあたりで生じていることかもしれないし、芭蕉の心の中で生じていることなのかもしれない。あるいは音と芭蕉とのあいだに生じていることだというのが一番正しいかもしれない。とにかくなんらかのことが芭蕉の身邊にただよった。そして、そのことをことばにして言い表そうとして、芭蕉は「古池や蛙飛び込む水の音」と詠んだのである。」(『時間と自己』p. 22-23)

この一文では、この俳句の意味が「もの・こと」論の援用によって説明されている。「もの・こと」論の基本的な解釈をここで示すのはさけるが、この「もの・こと」論を用いてさらにこの句に分析をほどこすなら、さらにこう言うことが出来よう。

「音と芭蕉とのあいだ」に決定的に「こと」を生じさせたのは音であるに違いないのであるが、

それほどの効果を生じたのは「音」(おと)という日本語がもともと「こと」に属しているからだ。先に見たごとく、国語辞典の「音」という言葉の説明には「内容」という言葉がつけ加えられていた。この「内容」というのは実は「こと」ではないのか。

話がもとにもどるが、「汽車が丹那トンネルを通る音だ。」と、いういい方が、日本語で可能なのは、「音」に「こと」が含まれているからである。つまり、(音響学的)音について述べているような形をとりながら、その音は同時に「こと」を述べているのである。したがってこの文を「汽車が丹那トンネルを通っていることだ。」と、古文の現代語訳風に言ってみることも可能であろう。

又、先程の句の「ほろほろ」とについて言えば「ほろほろ」はオノマトペである。オノマトペというのは、かならず「こと」を述べているものである。「ほろほろ」はh-o-r-o-h-o-r-oというある種の印象を引き起こす音の集合体であるばかりでなく、時間的経過を想起させる構造(この場合はoについては4回、horoについては2回の繰り返し)をもっており、「こと」を「こと」のまま取り出してきて感じさせる、大変重要な働きをしている。これに対し、'pétale après pétale'は表面的な形こそ真似ているが、'pétale'があきらかに「もの」である上、'après'が「もの」と「もの」の関係を述べることによって、ようやく「こと」を引き上げて来ているために、相当に印象が違う。日本人はこの「ほろほろ」に「こと」を感じ、いわば無音の「おと」を聞いてしまうので、この印象は次の「瀧の音」に重なって行くが、フランス語の'fracas'は「もの」としての音であるので、結局フランス訳では二つの「もの」が空間的に重なるだけで、全体的な「こと」が充分に形成されない。この「こと」よりも「もの」が目立ってしまう雰囲気やをわずかに和らげているのは論理性を失わせるためにひかれたティレ(ダッシュ)であるが、どれほどの効果があるのか疑問である。

おわりに

日本語の「音(おと)」は「こと」につながる。そして日本語は「こと」を中心に表現していく言語であるから、必然的に、この「こと」につながる「音」が言語のレベルでは沢山のオノマトペとして現れることになる。これに対し、フランス語の'son'や'bruit'はすでに理性で分類された「もの」としての音である。この音に対する態度は対象を常に「もの」化して、「もの」と「もの」の関係から「こと」を表現しようとするフランス語の根本的性質からくるものであるが、このような言語にオノマトペが現れることは極めて不自然なことであり、むしろ抑制を常に受けることになる。

せりふの表記についても同じことが言え、日本語ではオノマトペを扱う際と同様に、呼び声、笑い声、沈黙、あるいは、あくびやくしゃみにいたるまで、さまざまな工夫をこらして音を写し取ろうとするが、フランス語では一種の'bruit'とでも言うべきそう言ったものは、ほとんど刈り取られてしまうのである。

英語における事情はフランス語に基本的に似ているが、やや異なる点もあるので、機会をあらためて取り扱うが、英語圏の人が日本語のオノマトペについて書いたエッセーから次の言葉を引用しておく。

「英語が母国語である人々にとっては、物音と状態を「音声化」するよりも「具象化」するように育てられたから、擬音語と擬態語をマスターすることの一つは、物音だけでなく、状態をも「聞く」能力を鋭敏にすることだと思います。」—J.J.ベーリング「物音も状態も「聞く」こと—擬音語と擬態語に関して—」(日本語教育68号)

注

- 1) 本稿は「オノマトベに関する対照言語学的考察」(高知大学学術研究報告 第37巻)(1988)として、まとめたものの一部を再度取上げ、一層の探究を試みたものである。

参考(引用)文献

- 1) 木村敏, 時間と自己, 1982, 中公新書.
- 2) 金田一春彦, 日本語への希望, 1983, 大修館書店.
- 3) 日本語教育学会編, 日本語教育(68号), 1989年7月号.
- 4) 川端康成, 雪国, 昭和31年, 角川文庫.
- 5) 川端康成, 山の音, 昭和32年, 新潮文庫.
- 6) 安本美典, 「現代の文体研究」, 岩波講座「日本語10—文体」所収, 1977, 岩波書店.
- 7) 大辞林, 1989, 三省堂.
- 8) 広辞苑, 昭和47年, 岩波書店.
- 9) 仏和大辞典, 1988, 小学館.
- 10) Honoré de Balzac, Facino Cane/El Verdugo, (石田友夫訳注), 昭和42年, 大学書林語学文庫.
- 11) Emile Zola, La mort d'Olivier Becaille, (水谷謙三訳注), 昭和41年, 大学書林語学文庫.
- 12) Basho, Jours de printemps —haïku, (traduit du japonais par Alain Kervern), 1988, Paris, Arfuyen.
- 13) Yasunari Kawabata, Pays de neige, (traduit par Bunkichi Fujimori et Armel Guerne), 1960, Paris, Albin Michel.
- 14) Yasunari Kawabata, Le Grondement de la montagne, (traduit par Sylvie Regnault-Gatier et Hisashi Suematsu, 1969, Paris, Albin Michel.
- 15) Sélection du Reader's Digest, avril 1989.
- 16) Reader's Digest, Aug. 1989.
- 17) Le Petit Robert, 1972, S. N. L.
- 18) Petit Larousse en couleurs, 1988, Librairie Larousse.
- 19) Nouveau dictionnaire des synonymes, 1977, Librairie Larousse.

(平成元年10月5日受理)

(平成元年12月27日発行)

